

で、わたしは、またそりに乗って、いそぎました。そこからさきは、また平野つづきで、村と
いっても家はいくらもないような、さびしいところですよ。

わたしは、この平野をよこぎって、むこうのウメアという村にとまるつごうにしています。
ところが、午後ウメアのひとつつてまえの駅舎まできますと、二頭しかない馬が、二人づれの材
木商の旅客に借りられたそうで、わたしは、夜七時まで、むなしくそこで待っていました。と
ころが馬はまだかえってきません。わたしは気がせくので、そこいらの農家をさがしてまわり、
ようやく一頭の馬を見つけました。

駅の番人は材木屋といっしょに乗っていったそうで、かみさんができて、わたしの馬にか
いばをくれました。ここからウメアまではまだ二十マイルもあるのです。もうとちゅうには、
食事をするところもないので、ぜひここで晩飯を食べてなくてはなりません。それで、番人
のかみさんにたのみますと、かみさんは、ころよく、家へつれていき、火のそばにすわらせ
て、おいしいコーヒーと、ジャガイモと、となかいの肉のやいたのをだしてくれました。その
家は、大きな黒い森のそばにたっているのです。食事をしていると、きゆうにうしろのその
森の中で、ごおうごおうごおうと、北風が木ぎをゆすつてうなりはじめました。かみさんは、

「おやおや、ひどい風ができましたね。わるい晩ですこと。これじゃうちの人は、たぶん、ウメ
アにとまってあしたの朝でなければかえりませんまい。むこうへおつきになったら、きつと駅舎
にいますでしょう。かわりにラルスをつけておあげします。ラルスはあすの朝、うちの人とい
っしょにかえればいいんです。」といます。

「ラルスというのはだれです。」と聞きかえしますと、

「手まえどもの子どもですよ。あいにく近所にも、だれもおともをするものがいませんので
……。ラルスはいま馬のくらづけをしております。」とかみさんは答えました。

と、ちやうど、それとどうじに戸口があいて、十二ばかりの小さな男の子がはいつて来まし
た。きぬのたばのようになつた金色の髪の毛を、顔のうしろにふさふさとかぶつた、ほほ
のまつ赤な円い青いきれいな目をしたかわいい子どもです。わたしはかみさんが、こんな嵐の
晩に、こんな小さな子どもをよくへいきでだすものだとおどろきました。

「ラルス、ここへおいで。」と、わたしは、その子の手をとり、

「おまえ、こんな晩にでていくのは、こわいだろう？」と聞きました。子どもは、きよとんと
目を見はって、ほほえんでいます。かみさんはこにこわらつて、